The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中学生のグループ間の地位といじめ被害・加害の関係性の検討
Author(s)	水野, 君平; 加藤, 弘通; 太田, 正義
Citation	対人社会心理学研究. 2019, 19, p. 14-21
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71969
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

対人社会心理学研究 2019 年, 19 号, 14-21.
論文区分:資料

中学生のグループ間の地位といじめ被害・加害の関係性の検討

水野 君平(北海道大学大学院教育学院)
加藤 弘通(北海道大学大学院教育学研究院)
太田 正義(常葉大学教育学部)

「スクールカースト」はいじめの原因であると教育評論家から指摘されているが、実証的な知見が不足しているのが現状である。そこで本研究では、日本の中学生(N=2,384)を研究協力者とした質問紙調査によって、所属するグループの地位が学級内で中心的か否かという視点から「スクールカースト」といじめの関連を検討した。質問紙では、友だちグループ間の地位、いじめ被害・加害をすべて自己報告によって測定した。分析の結果、グループ間の地位といじめ被害・加害の一部の項目で有意な関連を示したが、関連性の程度は非常に小さいものであった。つまり、自分のグループは中心的か否かと思うという視点で「スクールカースト」といじめの関係を検討した場合、これまで指摘されてきた「スクールカースト」といじめの関連は本研究の実証的調査からは殆どみられないということが示された。この結果をふまえ考察では、なぜグループ間の地位といじめの関連性がみられなかったかについて、いくつかの可能性を挙げながら議論した。

キーワード:いじめ、中学生、「スクールカースト」、仲間内の地位

問題と目的

「グループ間の地位」の問題

中学生以降、生徒は「友人グループ(もしくは、仲良しグループ)」(以下、「グループ」とする)と呼ばれる同性かつ小人数のメンバーから構成されるインフォーマル・グループを形成して行動することが多い(e.g., 石田・小島, 2009)。近年ではこのグループに関わる問題として「スクールカースト」の問題が指摘されている(森口, 2007;鈴木, 2012)。鈴木(2012)によれば、「スクールカースト」とは学級内で生徒が所属するグループ間の地位の差といわれ、生徒たちはグループ間で互いの地位の差を把握しているという。また、高地位グループの生徒は賑やかで目立ち、気が強く、異性からの評価が高いなどの特徴をもっており、クラスの中心に位置すると言われる(鈴木, 2012)。

「スクールカースト」に関する実証的な研究では、「スクールカースト」を「学級内でのグループ間の地位格差」とみなし、その地位についてはグループ間の地位という観点から研究が進められてきている(鈴木, 2012;水野・加藤・太田, 2017;水野・太田, 2017)。そこで本研究でも、「スクールカースト」を「学級内でのグループ間の地位格差」と定義し、グループ間の地位の観点から議論を進めていく 。

「スクールカースト」と学校適応・いじめの関係性

現在おこなわれている中学生の「スクールカースト」に関わる研究では主に学校適応(e.g., 鈴木, 2012)といじめ(森口, 2007;堀, 2015;斎藤, 2017)との関連が指摘されている。まず、学校適応との関連を検討した先行研究では、高地位のグループほど影響力や学級活動などでの主導権をもっており、高地位グループの生徒はコミュニケーション能力や学校適応が高いこと(鈴木, 2012)、また地位の高さと学校適応の関連は社会的支配志向性が媒介していることが明らかとなっている(水野・太田, 2017)。そして、いじめとの関連を検討した先行研究では、「スクールカースト」の中で、地位が低いことはいじめ被害のリスクの 1 つとなり得ること、またいじめを受けることによって「スクールカースト」における地位も低下すると教師や評論家から指摘されている(森口, 2007;堀, 2015)。さらに、小学生を対象にした調査からは効果量がかなり低い($|\beta s|<.01$)ものの、グループの地位が低いと言語的いじめを受けやすいことが明らかになっている(水野他, 2017)。

「スクールカースト」のような目立ちやすさ、中心性、周囲への影響力を反映する学校内の社会的地位(social status)について、欧米諸国では人気(popularity)という概念をもとに研究知見が多く蓄積されてきた(e.g., Cillessen, Schwalz, & Mayeux, 2011)。例えば、自己報告で人気を測定することや、同じ学級や学年の仲間から「人気のある子ども」や「人気のない子ども」を指名させる仲間評定(peer nomination;e.g., Cillessen & Mayeux, 2004)を用いて、その指名数や指名率をもとにして生徒個人の「認識された人気(perceived popularity)」を測定することによってさまざまな変数との関連が示されてきた。例えば、人気は社会的スキル(Andreou, 2006)、リーダーシップ、向社会的行動(Gangel, Keane, Calkins, Shanahan, & O'Brien, 2017)と正の関係にあること、その一方で、いじめ加害(bullying)とも正の関係があることも示されている(Caravita, & Cillessen, 2012;Caravita,

Gini, & Pozzoli, 2012)。また人気といじめ被害(victimization)は負の関係であることも知られている(Ahn, Grandeau, & Rodkin, 2010；de Bruyn, Cillessen, & Wissink, 2010)。つまり、上記の先行研究を概観すると、人気が高い生徒ほど攻撃的であり、人気が低い生徒ほど攻撃の被害に遭う可能性が高く、時にはいじめにも発展する可能性もあるということである。その理由としては、いじめを含め攻撃的であることが人気と関連するのは地位の維持や向上の手段として攻撃性が機能しているからとされている(e.g., Cillessen, & Mayeux, 2004)。

このように人気が高いほど社会的な能力が高く目立ちやすさや周囲への影響力をもつなど、人気という概念は「スクールカースト」と近い概念で、「スクールカースト」同様、いじめと関連することが明らかにされている。しかし、人気は測定法からもわかるように個人間の地位を説明するものであり、グループ間のような集団間の地位を反映する概念ではない。そのため、人気の研究で蓄積された知見がそのまま「スクールカースト」というグループ間の地位といじめの関連性を説明できるとは限らない。さらに、これまでの「スクールカースト」といじめの関係については、以下 2 つの問題がある。

第 1 に、中学生を対象とした森口(2007)や堀(2015)の知見は経験的な事例に基づくものであり、「スクールカースト」といじめの関係は仮説の域を出ず、実証データによって仮説を検証する必要がある。すなわち、本当に「スクールカースト」といじめが関連するのかどうかを議論するためには、中学生を対象にした計量的調査をもとにして森口(2007)や堀(2015)の指摘を検証する必要がある。第 2 に、「スクールカースト」といじめ加害の関係を検討した研究がなされていないという問題である。というのも、先行研究では専ら「スクールカースト」での地位の低さがいじめ被害のリスクとなることは指摘されてきたが(森口, 2007)、「スクールカースト」での地位といじめ加害との関係については触れられていない。つまり、「スクールカースト」といじめの関連を議論するためにも、いじめ被害だけではなく、いじめ加害という側面からも検討する必要があると考えられる。

本研究の目的

以上を踏まえ、本研究ではグループ間の地位によっていじめ被害・加害の頻度が変化するかを検討することで、「スクールカースト」といじめ被害・加害の関係性を明らかにすることを目的とする。その際、本研究ではグループ間の地位に関して水野・太田(2017)と同じく、生徒の主観的報告を用い、「生徒本人によって知覚された主観的なグループ間の相対的な地位」(以下、グループ間の地位)を測定する。それにより、グループ間の地位を「スクールカースト」における地位の指標とする。また、本研究の資料的価値を高めるためにも、測定項目の集計表や散布図を出すことでいじめの被害・加害の実態や分布を示す。

方法

調査協力者と調査時期

本研究の調査協力者は小都市であるＸ県Ｙ市に位置する公立校の中学生 1―3 年生の 2,384 名であった。内訳は１年生773名(男子393名,女子380名)、2年生810名(男子 409 名, 女子 401 名)、3 年生 801 名(男子 418 名, 女子 383 名)であった。なお調査時期は 2016 年 7 月である。

調査内容

いじめ被害の頻度 いじめ被害について、「今の学年に入ってから、次のようないじめを受けたことがありますか」と教示した。具体的な内容に関しては、加藤・太田・水野(2016)を参考にして身体的いじめ、言語的いじめ、関係的いじめ、ネットいじめ、性的ないじめについて計 8 項目で回答を求めた。質問項目の詳細については Table2 に示した。回答件数については、香港の小学校でのいじめの実態を検討した調査(Wong, Lok, Lo, & Ma, 2008)を参考にして「まったくない(1 点)」、「1―2 回ある(2 点)」、「3―5 回ある(3 点)」、「6―10 回ある(3 点)」、「11 回以上ある(4 点)」の 5 件法で尋ねた。

いじめ加害の頻度 いじめ加害については、いじめ被害の項目よりも後のセクションで尋ねた。教示は「今の学年に入ってから、誰かに対して次のようなことがありますか」であった。質問項目は、身体的いじめ、言語的いじめ、関係的いじめ、ネットいじめ、性的ないじめについて、計 8 項目をいじめ被害の頻度と同じ内容・回答方法を用い、項目の表現が加害になるように変更して尋ねた。

グループ間の地位 グループ間の地位に関しては、水野・太田(2017)を参考に作成した。まず、「あなたがクラスの中で一番関わっている『仲良しグループ』について質問します」と教示した。次に、「私の仲良しグループはクラスの中で中心的な存在だと思う」について「全くそう思わない(1 点)」―「とてもそう思う(5 点)」の 5 件法で回答を求めた。また、回答の選択肢には「グループに入っていない」も含めて、グループに入っていない生徒はそこに回答するように求めた。グループに入っていないと回答した生徒は有効回答数 2,347 人のうちの 177 人(7.54%)で、その回答はグループに関わる分析で除外した。

調査の手続きと倫理的配慮

本研究の実施に当たり、所属機関の倫理審査の承認を受けた。調査の手続きは学級ごとに一斉に行われ、質問紙と封筒を配布した。そして、家にそれらを持ち帰って

回答し封緘した上で学校にもってくることを教示して後日回収した。調査実施時には、答えたくない質問には回答しなくてよいこと、成績と関係しないこと、回答の匿名性が保たれることを教示した。

結果

変数の集計

まず、グループ間の地位の平均は 3.06(*SD*=0.99)であり、回答の詳細は Table1 に示した。概ね水野・太田(2017)と同様の分布であることが確認された。

次に、いじめ被害の頻度における項目別の回答割合を Table2 に、いじめ加害の頻度における項目別の回答割合を Table 3 に示した。その結果、いじめ被害に関する項目に「まったくない」と回答した生徒の割合が約 69—97%を占めていた。具体的には、「かげで悪口を言われた」でも約 69%の生徒が一度も経験していないと報告しており、「服を脱がされたり、性的な嫌がらせをうけたりした」では約 97%の生徒が一度も経験していないと報告していた。いじめ加害に関してもほぼ同様の傾向がみられ、加害で「まったくない」と回答した生徒の割合が約 66—98%を占めていた。つまり、項目別にみると半数以上の生徒はいじめ被害・加害に関わりがなく、回答の分布には偏りが確認された。また、Table2 と Table3 をみると、物を隠されるいじめ被害以外のすべての種類のいじめ被害・加害で 6—10 回いじめに関わった回答の割合よりも 11 回以上いじめに関わった回答の割合の方がわずかに多かった[1)]。

グループ間の地位といじめ被害・加害の関連

グループ間の地位といじめ被害・加害の関連を検討するために、これらの間のスピアマンの順位相関係数 ρ を算出し、バブルチャート[2)]でプロットした(Figure1, Figure2)。その結果、すべてのいじめ被害・加害の項目における回答者の人数は 1 点(「まったくない」)に集中しており、いじめ被害・加害の一部の変数では有意な相関係数が得られたが、値に着目すると.10 を下回る値($|\rho s|$=.05—.07)であった。

Table 1 「私の仲良しグループはクラスの中で中心的な存在だと思う」で測定したグループ間の地位の回答割合

回答	全くそう思わない	そう思わない	どちらでもない	そう思う	とてもそう思う
割合(%)	6.04%	20.69%	42.03%	23.55%	7.70%

注)示した値は欠損値を除いて算出した。

Table 2 いじめ被害の頻度における項目別の回答割合

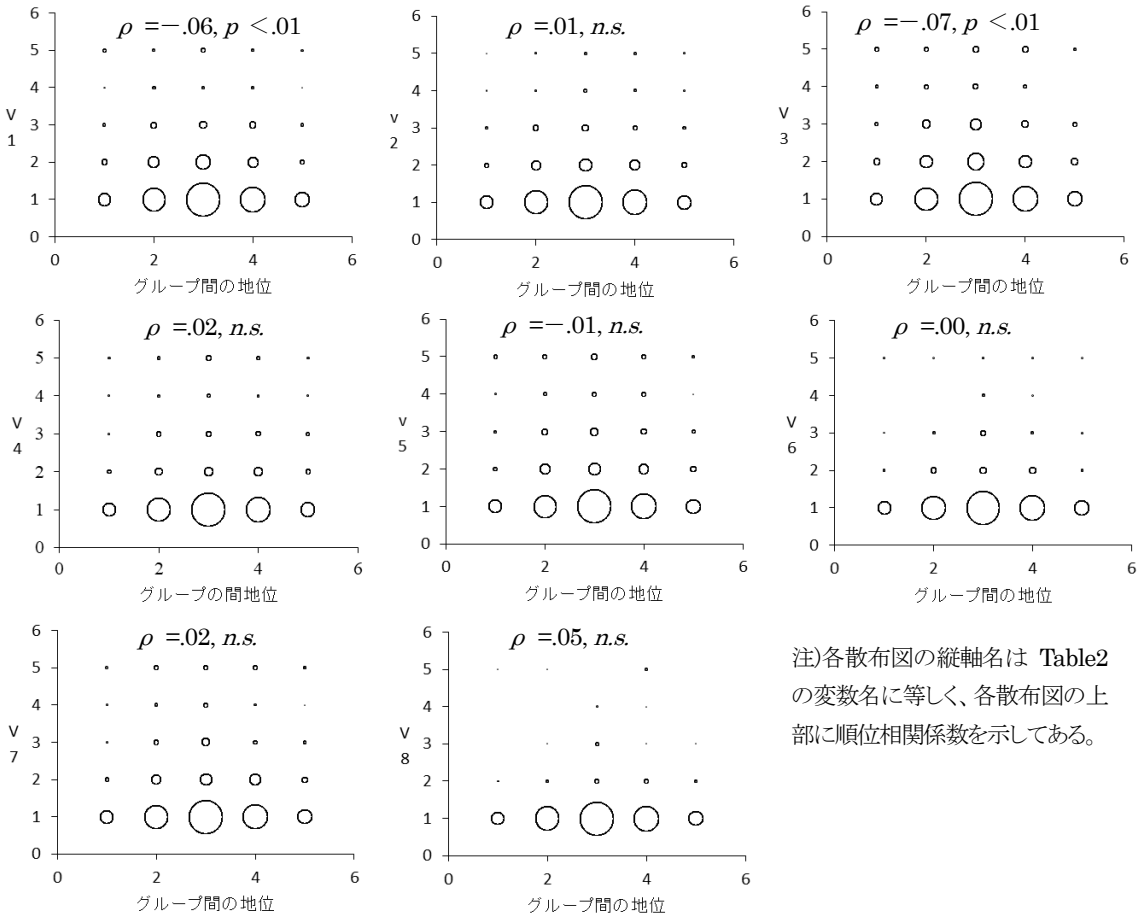
変数	項目	まったくない	1, 2 回はある	3, 5 回はある	6, 10 回はある	11 回以上はある
V1	遊ぶふりをして軽くたたいたり、おされたりした	80.91%	11.45%	3.86%	1.13%	2.64%
V2	ものを取られたり、かくされたりした	81.81%	12.80%	3.54%	1.01%	0.84%
V3	なぐられたり、けられたりした	85.46%	8.05%	3.12%	1.05%	2.32%
V4	服を脱がされたり、性的な嫌がらせをうけたりした	97.02%	1.89%	0.67%	0.17%	0.25%
V5	直接、悪口やイヤなことをいわれた	77.51%	12.88%	4.62%	1.72%	3.27%
V6	かげで悪口をいわれた	69.06%	17.38%	7.43%	2.23%	3.90%
V7	仲間はずれや無視をされた	77.39%	14.91%	4.86%	1.13%	1.72%
V8	パソコンや携帯電話、スマホを使って嫌なことをされた	93.37%	4.32%	1.64%	0.25%	0.42%

注)示した%は欠損値を除いて算出したものである。

Table 3　いじめ加害の頻度における項目別の回答割合

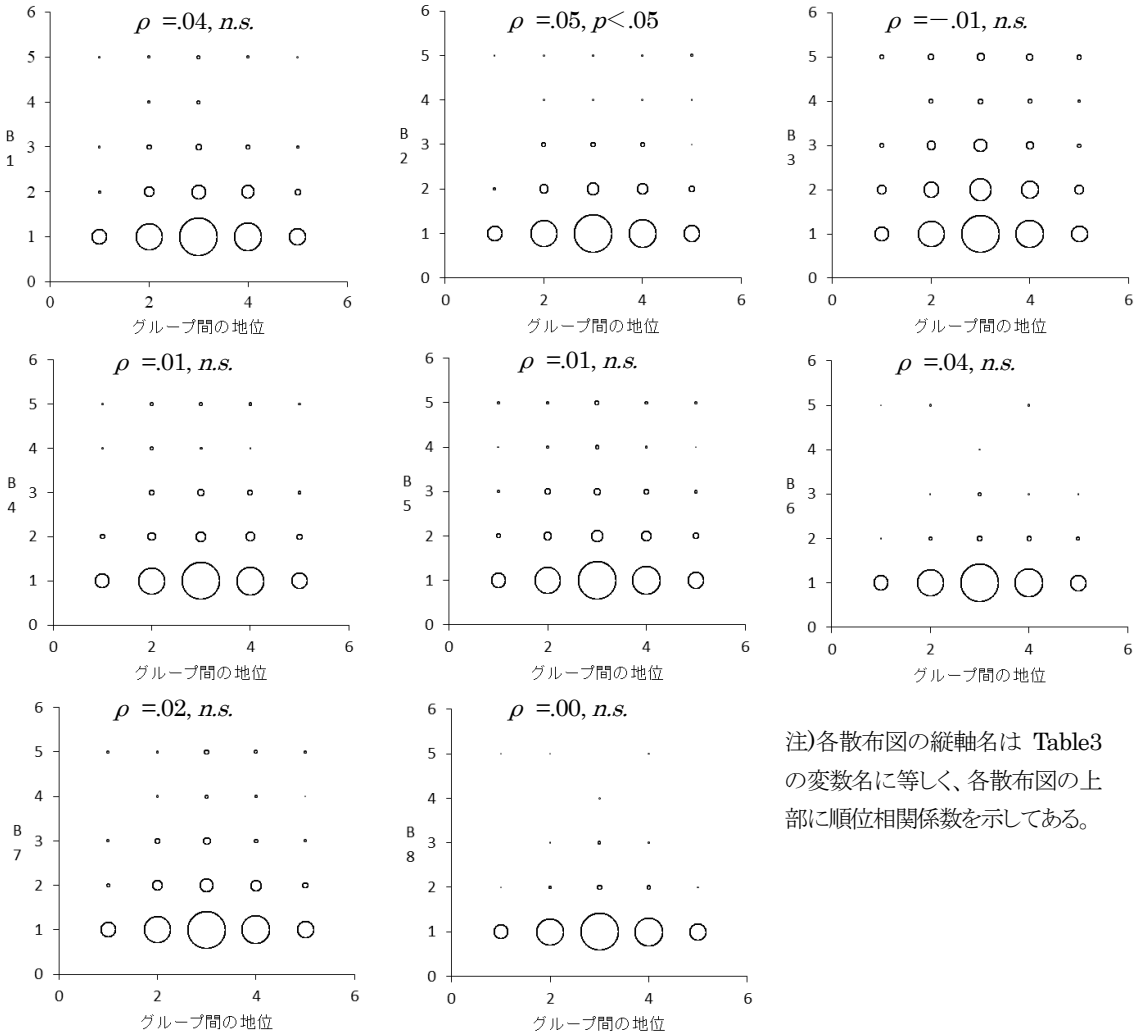
変数	項目	まったくない	1, 2 回はある	3, 5 回はある	6, 10 回はある	11 回以上はある
B1	遊ぶふりをして軽くたたいたり、おしたりした	85.03%	10.52%	2.43%	0.67%	1.34%
B2	ものを取ったり、かくしたりした	88.29%	9.57%	1.47%	0.17%	0.50%
B3	なぐったり、けったりした	87.70%	8.05%	2.74%	0.55%	0.97%
B4	服を脱がしたり、性的な嫌がらせをした	98.11%	1.26%	0.42%	0.08%	0.13%
B5	直接、悪口やイヤなことをいった	85.97%	8.74%	3.28%	0.76%	1.26%
B6	かげで悪口をいった	66.82%	22.02%	6.46%	1.55%	3.15%
B7	仲間はずれや無視をした	84.20%	12.49%	2.22%	0.42%	0.67%
B8	パソコンや携帯電話、スマホを使って嫌なことをした	97.44%	1.81%	0.42%	0.08%	0.25%

注)示した%は欠損値を除いて算出したものである。



注)各散布図の縦軸名は Table2 の変数名に等しく、各散布図の上部に順位相関係数を示してある。

Figure 1　いじめ被害とグループ間の地位の順位相関係数(ρ)と散布図(バブルチャート)



注)各散布図の縦軸名は Table3 の変数名に等しく、各散布図の上部に順位相関係数を示してある。

Figure 2 いじめ加害とグループ間の地位の順位相関係数(ρ)と散布図(バブルチャート)

考察

結果のまとめ

本研究の主な目的はグループ間の地位の視点から、中学生における「スクールカースト」といじめ被害・加害の関係性を検証することであった。分析の結果から、グループ間の地位といじめ被害・加害には一部で有意な関連が見られたが関連性の程度はかなり小さいことがわかった。

いじめ被害・加害の頻度の分布

まず、本調査から得られたいじめ被害・加害の実態について述べていく。各項目の得点分布を個別にみると被害・加害それぞれ 70%程度の生徒がいじめと関わりがないこと、全体でも約 50%の生徒がいじめと関わりないことがわかった。これはまったく同一の調査内容ではないが、日本における調査(国立教育政策研究所, 2016;村山他, 2015)のいじめ被害・加害の割合と類似した傾向であった。ネットいじめの被害・加害に関しては、加害では 2.56%、被害では 6.63%の生徒が関わっており、日本の中学生を対象とした先行研究(e.g., 国立教育政策研究所, 2016;村山他, 2015)の被害割合(1%以下―25%)、加害割合(1%以下―26%)の範囲内であったが、研究間で割合が大きく変わるため、今後は統合的な検討が必要だろう。

また、いじめ被害・加害の回答割合に注目すると以下のこともわかる。香港の小学生を対象にした Wong et al.(2008)のいじめ調査の結果とほぼ同様に、6―10 回よりも 11 回以上いじめに関わる生徒がわずかに多い傾向にあった。つまり、日本でも香港と同様に全体に占める割合は数%というごくわずかな割合であっても、中期間にわたるいじめよりも長期にわたる深刻ないじめの方がわずかに多い可能性が示唆された。深刻ないじめは時に自死などの事件に発展する場合がある。

今後は、質的な調査によって深刻ないじめの実態も明らかにする必要があるだろう。

「スクールカースト」といじめ被害・加害の関係性

グループ間の地位といじめ被害・加害の関連について、結果を考察する。本研究の調査によって、自分のグループが中心か否かという主観的な報告に基づいてグループ間の地位といじめ被害・加害の関連を検討した場合、一部のいじめ被害・加害の項目で統計的に有意な結果を得られたがその関連の程度はかなり弱いこともわかった。すなわち、本研究や水野他(2017)で示されたグループ間の地位といじめの関連性($|\beta s| < .01$)は実質的な意味がない値と考えられるだろう。このことから、先行研究(森口, 2007；堀, 2015；斎藤, 2017)で経験的に指摘されてきたような、「スクールカースト」といじめの関連性は実際のところ非常に弱い可能性が考えられる。このことは教育現場や世間一般で、調査に基づかず暗黙の裡に仮定されてきた「スクールカースト」といじめとの関係性を再検討する必要性を唱えるものであり、実践的にも意義を有していると考えられる。すなわち、本研究における実践に対する示唆として、「スクールカースト」のようなグループ間の関係性がいじめの主要な原因の１つとして考慮する必要性は更なる研究によって精査する必要があり、グループ間の関係性以外の要因に注目する必要があるだろう。また、本研究の結果に加えて、水野・太田(2017)の示した「上位グループほど集団間の格差を直接的に是認する集団支配志向性を媒介して学校適応感が高まる」という知見を考えると、次のように「スクールカースト」の問題を考えることができるだろう。すなわち、「スクールカースト」はいじめよりも学校適応感と強く関連すると考えられるということである。そして、先行研究が大学生への回顧的インタビューから、グループ間の理不尽な関りは、必ずしもいじめとはいえないと明らかにしたように(鈴木, 2012)、「スクールカースト」の問題はいじめという重大事態よりも、学校での居心地など学校適応上の問題として位置づける必要があるのかもしれない。

また海外の先行研究では関連が指摘されてきた個人の地位である人気といじめと比較して、本研究ではグループ間の地位といじめの間に実質的な関連性はみられなかった。このことについて、複数の可能性を挙げながら考察していく。第 1 の可能性は個人差である。高地位グループに所属する生徒ほど気が強いと指摘されているが(鈴木, 2012)、同じ地位のグループに所属する生徒でも、性格などの個人差まではまったく同じとは考えにくい。例えば、仮想的有能感といじめ被害・加害傾向との間には正の関係がある（松本・山本・速水, 2009)。同じ地位のグループに所属する生徒でも、仮想的有能感が高い生徒と低い生徒がいることは十分に考えられる。そのため、性格などの個人差の要因により、どのグループに所属するかということそれ自体はいじめに関連しなかった可能性が考えられる。

第 2 の可能性は文化差である。いじめ自体や、いじめと生徒の社会的地位の関連には文化差がある可能性があるということである。例えば、いじめ自体の文化差では、日本ではいじめが教室でクラスメイトや同級生によって多く行われる傾向にあるが、イギリスでは校庭で同級生や上級生によって行われる傾向にあるという知見がある(Kanetuna, Smith, & Morita, 2006)。また、人気といじめの関連の文化差については、ヨーロッパ(オランダ)では人気の高さといじめを仲裁することは関連しないが、アジア(インド)では人気が高いほど仲裁者になることが示されている(Pronk et al.,2016)。このことから、生徒の社会的地位を反映する人気と「スクールカースト」は概念がやや異なるということを差し置いても、文化差によって日本では生徒の社会的地位といじめは関連しなかった可能性も考えられる。

本研究の限界点

本研究の限界点として各項目を 1 項目で測定していたことが挙げられる。今後の研究ではグループ間の地位やいじめの項目を複数の項目で測定する必要があるだろう。

引用文献

Ahn, H. J., Grarndeau, C. F., & Rodkin, P. C. (2010). Effects of classroom embeddedness and density on the social status of aggressive and victimized children. *Journal of Early Adolescence*, *30*, 76-101. doi: 10.1177/0272431609350922

Andreou. E. (2006). Social preference, perceived popularity and social intelligence. *School Psychology International*, *27*, 339-351. doi: 10.1177/0143034306067286

de Bruyn, E. H., Cillessen, A. H. N., & Wissink, I. B. (2010). Associations of peer acceptance and perceived popularity with bullying and victimization in early adolescence. *Journal of Early Adolescence*, *30*, 543-566. doi: 10.1177/0272431609340517

Caravita, S. C. S., & Cillessen, A. H. N. (2012). Agentic or communal? associations between interpersonal goals, popularity, and bullying in middle childhood and early adolescence. *Social Development*, *21*, 376-395. doi: 10.1111/j.1467-9507.2011.00632.x

Caravita, S. C. S., Gini, G., & Pozzoli, T. (2012). Main and moderated effects of moral cognition and status on bullying and defending. *Aggressive Behavior*, *38*, 456-468. doi: 10.1002/ab.21447

Cillessen, A. H. N., & Mayeux, L. (2004). From censure to reinforcement: Developmental changes

in the association between aggression and social status. *Child Development*, *75*, 147-163. doi: 10.1111/j.1467-8624.2004.00660.x

Cillessen, A. H. N., Schwartz, D., & Mayeux, L. (Eds.). (2010). *Popularity in the Peer System*. NY: Guilford Press.

Gangle, M. J., Keane, S. P., Calkin, S. D., Shanahan, L., & O'Brien, M. (2017). The association between relational aggression and perceived popularity in early adolescence: A test of competing hypotheses. *Journal of Early Adolescence*, *37*, 1078-1092. doi: 10.1177/0272431616642327

堀 裕嗣 (2015). スクールカーストの正体―キレイゴト抜きのいじめ対応 小学館

藤 桂・吉田 富二雄 (2014). ネットいじめ被害者における相談行動の抑制―脅威認知の観点から 教育心理学研究, *62*, 50-63. doi: 10.5926/jjep.62.50

石田 靖彦・小島 文 (2009). 中学生における仲間集団の特徴と仲間集団との関わりとの関連―仲間集団の形成・所属動機という視点から 愛知教育大学研究報告, *58*, 107-113.

Kanetsuna, T., Smith, P. K., & Morita, Y. (2006). Coping with bullying at school: Children's recommended strategies and attitudes to school-based interventions in Japan and England. *Aggressive Behavior*, *32*, 570-580. doi: 10.1002/ab.20156

加藤 弘通・太田 正義・水野 君平 (2016). いじめ被害の実態と教師への援助要請―通常学級と特別支援学級の双方に注目して 子ども発達臨床研究, *8*, 1-12.

国立教育政策研究所 (2016). いじめ追跡調査 2013-2015 Retrieved from http://www.nier.go.jp/shido/centerhp/2806sien/tsuiseki2013-2015_3.pdf (2017 年 5 月 15 日)

松本 麻友子・山本 将士・速水 敏彦 (2009). 高校生における仮想的有能感といじめとの関連 教育心理学研究, *57*, 432-441. doi: 10.5926/jjep.57.432

水野 君平・加藤 博通・太田 正義 (2017). 小学生のスクールカースト, グループの所属, 教師との接触といじめ被害の関連 心理科学, *38*, 63-73. doi: 10.20789/jraps.38.1_63

水野 君平・太田 正義 (2017). 中学生のスクールカーストと学校適応の関連 教育心理学研究, *65*, 501-511. doi: 10.5926/jjep.65.501

森口 朗 (2007). いじめの構造 新潮社

村山恭朗・伊藤大幸・浜田 恵・中島俊思・野田 航・片桐正敏…辻井正次 (2015). いじめ被害・加害と内在化／外在化問題との関連性 発達心理学研究, *26*, 13-22. doi: 10.11201/jjdp.26.13

Pronk, J., Lee, N. C., Sandhu, D., Kaur, K., Kaur, S., Olthof, T., & Goossens, F. A. (2016). Associations between Dutch and Indian adolescents' bullying role behavior and peer-group status: Cross-culturally testing an evolutionary hypothesis. *International Journal of Behavioral Development*, *41*, 735-742. doi: 10.1177/0165025416679743

斎藤 環 (2016). 大人たちはなぜ「いじめ」に気づけないのか？―いじめの透明性 臨床心理学, *16*, 651-656.

鈴木 翔 (2012). 教室内カースト 光文社

Wong, D. S. W., Lok, D. P. P., Lo, T. W., & Ma, S. K. (2008). School bullying among Hong Kong Chinese primary schoolchildren. *Youth & Society*, *40*, 35-54. doi: 10.1177/0044118X07310134

註

1)なお、被害・加害の各 8 項目の合計得点が 8 点の生徒、すなわちまったくいじめに関わっていない生徒の割合は被害では 52.29%であり、加害では 54.20%であった。

2)バブルチャートでは、バブル(円)が大きいほど該当する人数が多いことを表す。

Investigation into the relationships between Inter-peer group status and victimization/bullying among Japanese middle school students

Kumpei MIZUNO *(Graduate School of Education, Hokkaido University)*
Hiromichi KATO *(Graduate School of Education, Hokkaido University)*
Masayoshi OTA *(Faculty of Education, Tokoha University)*

Some Japanese educational critics point out that "School caste" (i.e., the status hierarchy among peer groups in a classroom) causes school bullying. However, we have few empirical studies about "School caste". The aim of this study was to examine the relationships between "School caste" and school bullying, considering inter-group status as centricity within a classroom. Participants of this study were Japanese middle school students (N=2384). We used self-report questionnaires to measure inter-peer group status, bullying, and victimization. The result showed that inter-peer group status significantly linked with school bullying, but the magnitude of effect was very low. Contrary to the views held by some Japanese educational critics, the findings showed little relationship between "school caste" and school bullying when we consider status among "School caste" as intergroup status centricity within a classroom. The discussion deals with the several possible reasons for why "School caste" hardly linked to school bullying.

Keywords: school bullying, middle school student, "School caste", peer status